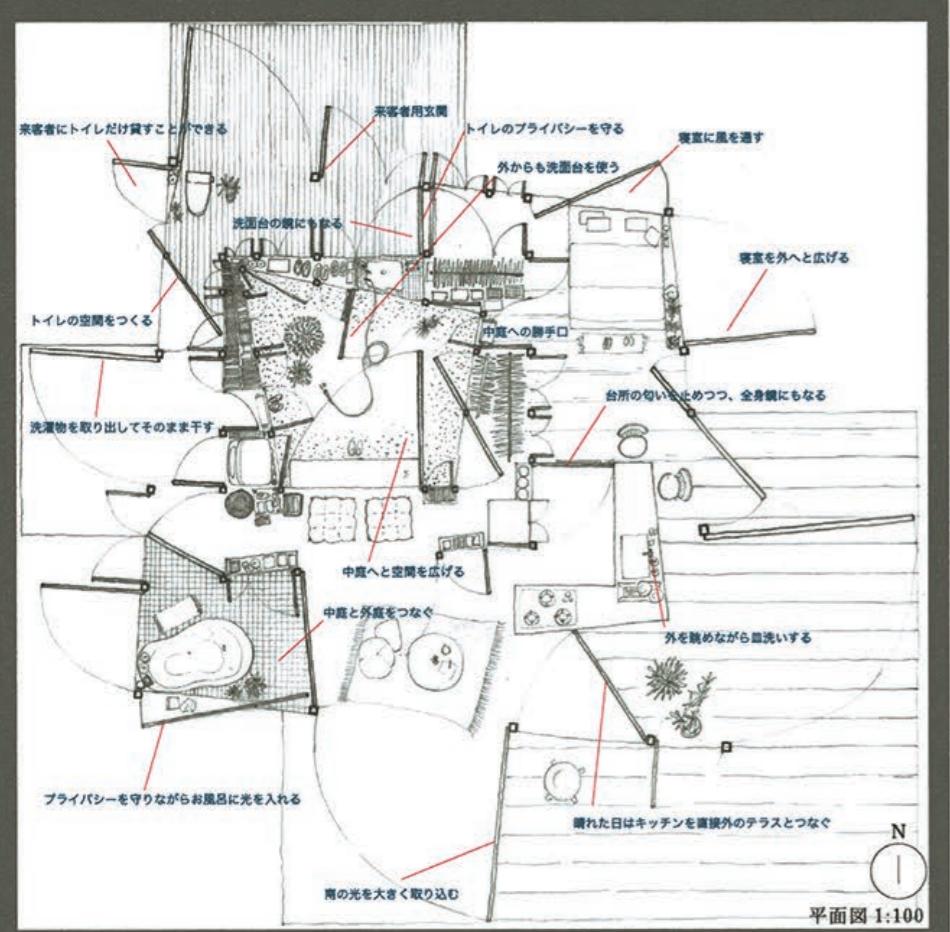
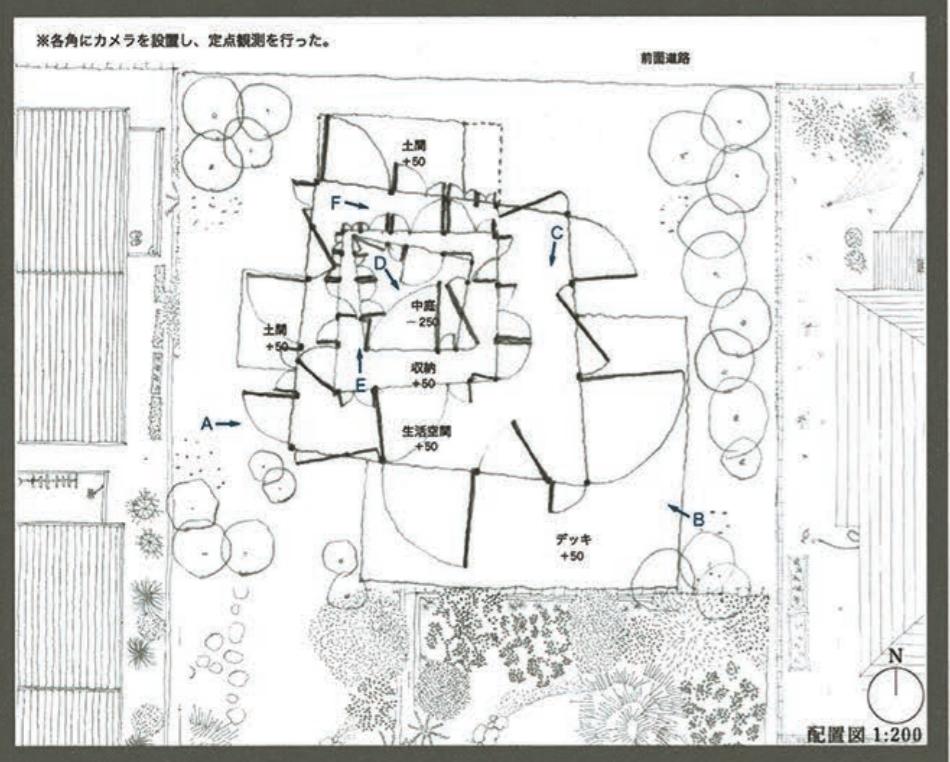
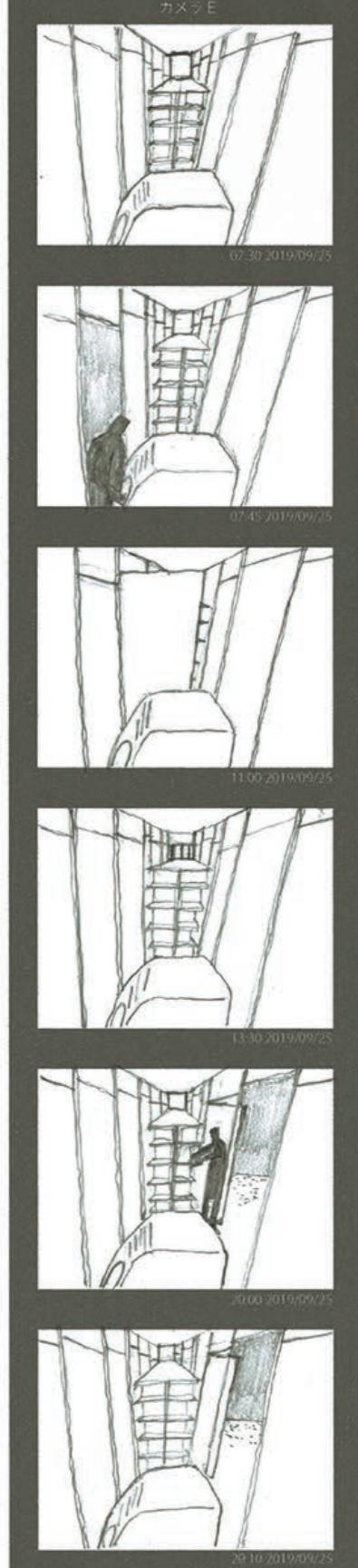
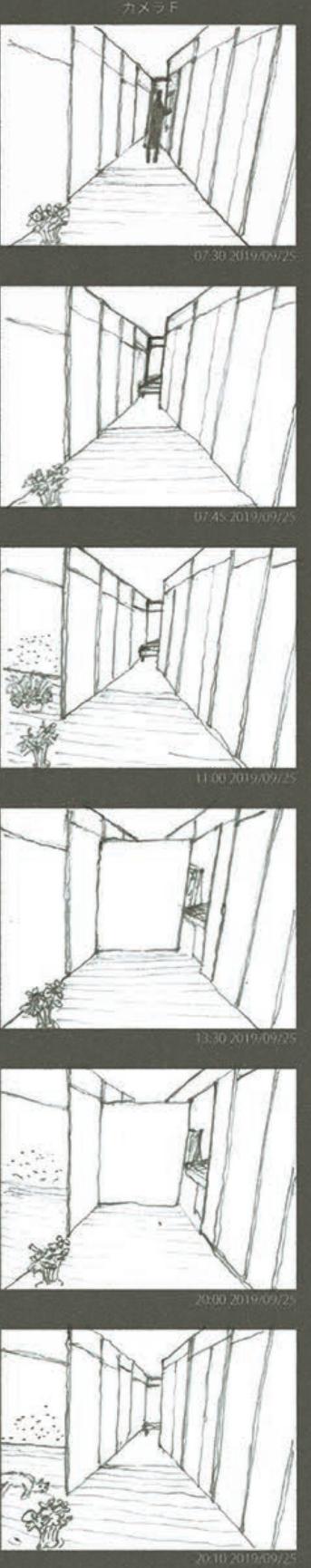


語られる家

0344



あとがき
愛の背景にはいつも「物語」がある。
物語とは、人の行動という時間軸を持つて構成される出来事の連鎖である。調和のとれたその出来事の羅列は、それを乱す出来事が介入することで前に進む。この家には扉しかない。
物を納める場所も、自分が生活する場所も、屋外に広がる都市も、扉を開くことでつながる。
この3つの領域が入れ子状に分けられた時、扉を開いた先に広がる向こう側の世界は、「選ばれる世界」として統一される。どの扉を開くか、いつ開くか、どのくらい開くかを決めるのはいつも住人である。本能的な小さな選択が日々の生活に入り込んだとき、人は物語を紡ぎ出す。

こうして、食器を取り出すことから都市へ出て行くことまで、生活のあらゆる出来事が絶続のないひとつの物語となつた時、建築と生活は共に語られ、愛に溢れていく。やがて、愛用している食器を取り出すようにオフィスの扉を開け、扉を開けて光を中へと受け入れるように、物語は今日も世界中で生まれているのだ。

まぶしくて目が覚めた。半分開いた東の扉から、夏のあいだ育ちすぎた名前の知らない花々がそよそよ揺れていた。私が寝るまでは、自然と私たちを家に閉じ込めた。日中は、家のあらゆる扉を開けにし、妻と試行錯誤しつつ、風の道を探りながら、夏のほとんどを過ごした。常に風が流れてくる絨毯の上で寝腰をしている。私が寝るまでは、自然と私たちを家に閉じ込めた。朝の冷たい風が吹いた。ずいぶん秋らしくなった。クリートの蒸し返すような暑さは、自然と私たちを家に閉じ込めた。北の重たい扉を、なんとなく開けてみる。お隣さんの柿の木の扇は風や光はもちろんだが、近くにいる生き物たちをも誘い込む。

お気に入りのタオルが入っている扉を開く。結婚前、妻が愛媛で買って来たものだ。ふわふわのタオルで顔を拭いた後は、決まって一服する。今日がはじまる。お風呂から外へ顔を出すと、隣のばあさんが何やらビニール袋を持って立っていた。私に気づいたばあさんは、大きな扇から入ってきて、花の苗をいくつかテーブルの上に置いた。私が扇間も家により、私たちが大きな庭を持っているからだ。私は扇を開けて、集めすぎて大量にある食器を見つめ、今日はどれを使おうかと考えながら、通り沿いの扉を開く。扇になつてもまだ暑いので、西の扉を大きく開いて湯船に丸まり本を読んでいると、チャイムが鳴った。お風呂場から外へ顔を出すと、隣のばあさんが何やらビニール袋を持って立っていた。私に気づいたばあさんは、大きいか扇から入ってきて、花の苗をいくつかテーブルの上に置いた。いつも日曜日には買って帰つて来てくれたのよ。」そう照れ臭そうに笑つた顔を見て、安心して扇を開く。余してあることは半年前のことだ。おじいさんが仲直りの時買つてきた花。結婚記念日に買つてきた花、子供の名前に付けていた花。花の話を教えてもらう事になったのを思い出した。

◆◆◆◆◆◆
◆◆◆◆◆◆

大粒の雨が、清々しいほどに地面に落ちる。夕立がきた。予想より三十分早い。家に着くまであと少しだったのに。朝飛び出してきたせいで、傘は持っていない。オフィスから持ち帰った紙類が極力漏れないよう小走りする。

スニーカーを乱暴に脱ぎ捨てて洗濯物が漏れていないか見に行こうとしたら、絨毯の上に洗濯物は見事に畳まれていた。夫はそういうところはきちんとしている。雨は降っているけど、いくつかの扇はあけっぱなしで、まつすぐ落ちる夕立のときは意外と雨はふりこまないし、明るいのに雨が降っている様子を大きな扇を介して見るのは気持ち良い。

夕食をとった私たちはいつものように、中庭の扇と位置の扇、リビングの扇を大きく開けて特に会話もなくだらだらと過ごす。

夜は少し肌寒くなつた、少しだけ扇を開けて私たちはベッドに入った。夫が、最近買った本を読んでいたらばあさんが来たこと、今日はおじいさんの一番お気に入りだった花を植えていたこと、話をしている途中で私たちがいつの間にか寝ていた。終わりのない物語たちは、今日も私たちの愛を支えていく。